

### モーツァルト：ファゴット協奏曲

モーツァルトの現存する唯一の「ファゴット協奏曲」。モーツァルトにとって最初の管楽器のための協奏曲であり、1774年にザルツブルク宮廷にいた奏者のために書かれたとされている。編成はオーボエ、ホルン各2本と弦楽合奏で、モーツァルトがギャラント様式に向かった時期の作品である。

第1楽章アレグロは協奏風ソナタ形式で、明るく伸びやかな2つの主題がファゴットという楽器の特質をよく生かしており、カデンツァも置かれてある。第2楽章アンダンテ・マ・アダージョもソナタ形式。オペラのアリアのように朗々と歌う旋律美を堪能できる。第3楽章はテンポ・ディ・メヌエットのロンドで、典雅なロンド主題が5回登場する間にファゴットが技巧を披露する。

### モーツァルト：オーボエ協奏曲

本曲は長らく消失作品のリストにあり、モーツァルト学者としても名高い指揮者のベルンハルト・パウムガルトナーによって、筆写譜が発見されたのは1920年のことだった。そしてフルート協奏曲第2番の原曲と同定されて1949年に出版され、ようやく陽の目を見た。1777年、ザルツブルクの首席オーボエ奏者ジュゼッペ・フェルレンディスのために書かれたもので、モーツァルト自身も非常に気に入っていたという。

3楽章からなり、第1楽章アレグロ・アペルトは、息の長い、天衣無縫の旋律があふれ出す。次の緩徐楽章では、弦楽伴奏を基調とした美しいオーボエの音色を堪能できる。フィナーレの第3楽章は軽快なロンドで、その主題は、のちに書かれた歌劇《後宮からの誘拐》のブロンデのアリア「何という喜びが」の旋律と酷似している。

### シューベルト：弦楽四重奏曲 第14番 《死と乙女》

シューベルトが27歳の1824年に作曲したもので、第2楽章の変奏曲主題に、彼が20歳の頃に書いた同名歌曲(D531)のピアノ伴奏旋律が用いられていることから、この題名が付けられた。歌詞はドイツの詩人マティアス・クラウディウスによる8行ほどの短い詩で、死に瀕した若い女性と死神との対話のかたちをとっている。死が恐怖ではなく“永遠の安らぎをもたらすもの”と捉えられているところが、いかにもロマン派らしい。

本曲を作曲したころ、シューベルトは病魔を自覚し始めていたとされ、それが反映されているのだろうか、4つの楽章全てが短調という異例の構成となっている。第1楽章は3つの主題をもつ大規模な二短調のソナタ形式、第2楽章は《死と乙女》の主題によるト短調の変奏曲形式、第3楽章は二短調のスケルツォ、第4楽章は切迫したロンド・ソナタ形式で、短調と長調の争いが繰り広げられるが、最後はやはり短調で終わる。